



TAEJI SAWAI

肖像

WEB CRAFTMAN'S
PORTRAIT

澤井妙治 (QOSMO)

バンドから楽曲プロデュース、プロダクト、広告、Web、映画のサウンドデザイン、インスタレーションと多岐にわたる分野で活躍する澤井妙治。幼少時代から多感な時期を越え、まさにロックな人生を歩んできた彼が行き着いたのは、純粋な「音」への追求だった。

取材：牧野武文
写真：石塚定人

Qosmo オフィスの階段にて。変わった形の階段には丸い窓があり、そこから差し込む光が不思議な空間を生み出している

●伝説の音

2013年4月、現実空間にアイルトン・セナが蘇った。常に冷静な走りをするセナは、現役時代から今も生きる伝説だ。そのセナの走りを蘇らせるプロジェクトを、澤井妙治は音楽友達である電通の菅野薫氏をはじめとした友人達とともに企画し、本田技研工業に提案した。1989年、日本グランプリ予選で、セナが見せたパーフェクトな走り……1分38秒041。鈴鹿サーキットの世界最速ラップを再現する。

F1カー・マクラーレンホンダMP4/5には、セナの操縦データが克明に記録されるテレメトリー（遠隔測定法）システムが搭載されていた。このデータを基に走りを光で、エンジンを音で再現したのが、「Sound of Honda / Ayrton Senna 1989」プロジェクト。澤井はサウンドディレクターを務めた。

この仕事は簡単ではなかった。セナのテレメトリーデータに合わせてエンジン音データの周波数を変える、そんなことでは“セナの音”にはならない。世界の人々はさまざまな方法でセナの音を聞いている。あの日、鈴鹿にいた人。テレビ中継で観ていた人。後にスマートフォンの貧弱なスピーカーで聞いた人。そして、コクピットに座っていたセナ本人。その誰をも納得させなければならない。「自分のすべてを出し切った。サウンドディレクターである僕が、これがセナの音だ！」と言い切らなければ、音が完成しないんです」

その決断は簡単ではなかった。完成した音を何度も何度も聞きなおして、「響かれる！」と心臓が縮みあがる瞬間があった。それでセナの音になったと決断できたという。

●PCとギターに明け暮れる学生時代

澤井は大阪で生まれ、4歳のときに奈良にある母の実家に引っ越した。「通称「寺村」と呼ばれているところで、山の麓にあるものすごく寂しいところでした」

地図で見ればどこにでもある町外れにすぎないのだが、小さな子どもの足では町までがはるか遠くに感じたのだろう。小学校は歩いて通っていたが、校門を出てすぐ町に住んでいる友だちと別れ、たった一人で千段の階段を上って、里山にかかるところにある自宅に帰らなければならなかった。

小学校3年生のときに、父が病死した。続けて5年生のとき、母が重病で長期入院したため、大阪の親戚の家に預けられた。「このときは怖かったですね。母も死んでしまったら、自分はどうなるんだろうと」

そのうえ、澤井には起立性低血圧という持病があった。午前中は血圧が上がらず、行動できない。そのため、学校も昼から登校す

ることが多くなっていった。精神面でも身体面でも辛さを抱えた澤井を、母は僕が望むものを買って与えることで慰めた気がする。「ゲームはよく買ってくれました。今から考えると、ゲームをすることで自分を保っていたのだと思います」

中でも「ドラゴンクエスト」シリーズには夢中になった。自身、「自分の音楽の原点」というように、ゲーム音楽を手掛けたすぎやまこういち氏の旋律は澤井少年の心をとらえ、音楽に興味を持つきっかけとなった。

中学生になるとパソコンに夢中になり、友人から買ったベースを皮切りに音楽にものめりこんだ。BOØWYやメタリカを聴き、レッド・ホット・チリ・ペッパーズのジョン・フルシアンテに憧れ、ギタリストになりたいと思うようになった。いわゆる“中二病”だが、生き方も次第にロックがかったという。

高校は、制服がなく私服でいいというところを選んだ。しかし起立性低血圧のため、奈良から大阪への1時間の電車登校中に貧血で倒れたりして身体的に通えなくなったため、母親が学校のそばにワンルームを借りてくれた。そこで一人暮らしをする澤井は、思うままに音楽にのめりこんでいった。

「高校を出たらプロのギタリストになろうと思っていました。自分のやりたいことをやろうと。恥ずかしい話、ノストラダムスだかに影響されて、近々この世の中は滅亡する。どうせ僕は死んでしまうと思ってたんです」これは少しも恥ずかしい話ではない。なぜなら、阪神大震災直後のことなのだ。澤井には、安っぽい終末論でさえ、リアリティをもって響いたのだ。

大阪のビデオ店でアルバイトをしながら、バンド活動を始めた。そして、ある人物と出会う。この人物が尋常ではなかった。

「犬を処分する保健所の前で批判をするライブをやってしまうような人です。才能はすごくあったと思う。音楽的にも教わることも多かった。シーケンサーの使い方も彼に教わりました。でも、常に無理を言う。明日の朝までに5曲つくれとか。そしてできないと殴る」

それはもう洗脳だったという。しかし、ふとしたきっかけでスタジオで大乱闘となった。「あらゆる楽器をぶんなげて、スタジオをめちゃくちゃにして、警察がくる騒ぎを起こして、バンドを脱退しました」

そして、澤井はシーケンサーに転じた。「人間関係に疲れてしまったんです。シーケンサーがあれば一人で音楽がつくれる。それにシーケンサーは僕のことを殴らない」

●Max/MSP との出会い

澤井は奈良に戻り、Power Mac G4を買って、Max/MSPの猛勉強を始めた。子どものころから音楽とパソコンが好きだった澤

井は、音楽をプログラムしていくMax/MSPが自分に向いていると感じた。しかし、身近に教えてくれる人はなく、情報源は音楽雑誌だけだった。3カ月して、Max/MSPの講習会が開かれるという情報を知り、参加してみた。

「驚きました。セミナーでは、僕にとってはごく初歩的なことばかりをやっている」

当時Max/MSPには薄い日本語マニュアルがついているだけだった。しかし、実は英語版マニュアルがあまりに詳細で膨大だったのだ。そのため、多くの日本人がMax/MSPの初歩的な使い方のレベルで足踏みしていた。

「僕は音楽雑誌に出ているMax/MSPを使った世界レベルの作品を、それが普通のことなんだと思ってたんです。どうやっていいのかわからないところは、自分で試行錯誤しながらMax/MSPの使い方を覚えていきました。それを3カ月やっていたら、日本の中ではMax/MSPを使いこなして作品をつくれるようになっていた」

この講習会に参加したことが大きな転機になった。自信が生まれたこともあるが、Max/MSPユーザーとのつながりができたことが大きかった。澤井はMax/MSPコミュニティの仲間と、portable[k]ommunityというユニットを結成、このユニットが大きな話題となった。ステージに楽器ではなくラップトップPCだけを並べて演奏するというスタイルは、今では珍しくないが、この当時は海外でもまだなかった。このユニットをきっかけに、仕事も舞い込むようになった。しかも、ギャラが破格なものばかりだった。「渋谷の洋服屋で、店内にずっと音楽を流しているんですが、特定の時間になったら店のジングルを自動的に流したいという依頼がありました。Max/MSPを使って組めば簡単なことです。そのギャラが100万円でした」

東京に拠点を移した澤井は、ドラゴンアッシュの「Grateful Days」にゲスト参加したことで有名になったシンガー・ACOと知り合い、アルバム「irony」などのサウンドプロデュースと作曲を担当することになる。しかし、それは大人たちとの戦いでもあった。「担当のA&Rに、生意気にも、おまえたちは音楽がわかっていないと、怒鳴りながらアルバムをつくっていました」

音楽を追求したい澤井と、売れるものを追求したいレコード会社側のぶつかり合いだ。

●音の仕事

澤井は多くは語らなかったが、当時の音楽業界になにかしら思うところがあったようだ。以降、音のインスタレーション展示を多く手がけるようになる。BOREDOMSのヤマツカ・アイ氏とAEOというユニットを組み、加速度センサーを使うというテクノロジーとボーカルが融合したライブを行うようになる。このAEOは世界中を回ってライブを行った。そして、澤井は最終的にドイツのベルリンに居を定めた。

「でも、ベルリンは僕には合わなかった」

澤井はもともと、「ミュージシャン27歳寿命説」を唱えていた。成功したミュージシャンは27歳のころに才能が枯渇したり、モチベーションが失せたりして、クリエイターとしての人生を終えると信じていた。澤井はまさに27歳になっていた。

「日本の友人たちは結婚したり、子どもが生まれたりして幸せそうにしている。僕はベルリンで、一人でなにをやっているんだろうと虚しくなりました」

しかし、世界中を回って、選んだ街がベルリンだったはずだ……澤井の帰る場所はもう一つしか残されてなかった。奈良の寺村だ。再び千段の階段を一人で上り、澤井が気づいたのは生活の中にある音だった。澤井はそれまでメディアアートの中でさんざんノイズを鳴らしてきた。でも、自分でノイズ音楽は聴きたいとは思わない。もう一度、音と人との関係を見つめなおしてみると、音に関わる仕事をしたいと思うようになった。

「生活の中の音、広告の中の音、Webの音。それを耳にして人の行動が変わるきっかけになることがあります。そこを追求してみたくなりました。今の僕はミュージシャンじゃありません。アーティストでもありません。耳に届く音をつくる人です」

幸いなことに、澤井が見捨てたはずだった東京には、人とのつながりが残されていた。そこから「音の仕事をする人」澤井に、音の仕事がくるようになった。その集大成がSound of Honda Ayrton Senna 1989だ。スマートフォンの貧弱なスピーカーや安いイヤフォンで聞いても、まぶたを閉じると、あのマクラーレンホンダの赤と白のツートン、そしてセナのヘルメットといった記憶の残像が蘇ってくる。音とは、人の心に直接刺激を与えてくれるメディアなのだ。

澤井妙治 (Qosmo) Taeji Sawai
<http://www.qosmo.jp/>

音の仕事／サウンドクリエイター。Audio／Visualユニットportable[k]ommunityをはじめ、プロデューサーとしてACOのアルバム「irony」に参加など仕事の幅は多彩。プロダクト、広告、Web、映画などのサウンドデザイン、センサーや映像、照明を用いた広告のためのインタラクティブシステムのデザインなどさまざまな「音の仕事」を手掛ける。



portable[k]ommunity
<https://www.youtube.com/watch?v=a-GltOd2ZMM>

2000 年秋に結成されたアーティストユニット。楽器をまったく使わず、複数の PowerBook G4 を使って、「音楽」を奏でる。そのサイバーなスタイルは、今日ではありふれたものになっているが、当時は目新しいものだった

澤井妙治の仕事

澤井は、さまざまな環境下での音の与える効果にフォーカスし、音に関する多様な表現を生み出す。



s3ga Mark III
<https://www.youtube.com/watch?v=MxLQQHmooHI>

portable[k]ommunity では、インスタレーション的な展示も行った。巨大な壁に向かって、3D マウスを持ったプレイヤーが身体を動かし、3D マウスの位置により映像と音楽が変化していく。プレイヤーはその仕組みを利用して、映像と音楽を操っていく。映像と音は、「仮想的な私」がテーマになっている。暴力的な映像、音が再生されるが、それはすべて自分が生み出したものというアイロニーだ

AEO
<https://www.youtube.com/watch?v=4K0yCZTHYYo>

澤井と BOREDOMS のヤマツカ・アイ (EYE) 氏を中心としたユニット。EYE 氏が持っている二つのデバイスは位置測定ができるようになっていて、動かすことで音に変化していく。また、このデバイスにはボコーラルマイクも仕込まれていて、EYE 氏がそれを使ってボコーラルパフォーマンスをする



iida calling
<http://www.au.kddi.com/original-product/archives/contents/calling/>

KDDI のキャンペーンサイト。5・7・5 のフレーズを Twitter で送ると、それにメロディがつき、ボコーロイドが歌ってくれる。利用者が文字を入らなかった場合には自動的に母音を伸ばしたりして補う。現在、中国語や英語での制作にもチャレンジしているという



hulu
<http://www.hulu.jp/watch/726870>

現在放送中の hulu のテレビ CM。映画評論家、故・淀川長治氏のアバターが、本人の声で「フールー、フールー」と連呼する。もちろん、この部分は淀川氏の音声録音から合成したもの。しかし、アクセントや微妙なニュアンスなど、淀川氏の言葉にするのは簡単ではなかったという



Tiny Riot
<https://itunes.apple.com/jp/app/tinyriot/id445796403?mt=8>
https://www.youtube.com/watch?v=FUATCZHKV_M

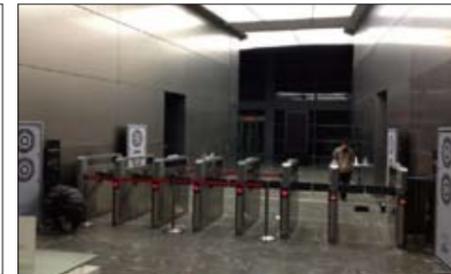
東日本大震災を機に、友人達と作った作品。iPhone を激しく振ると、ロックなギター、ドラム、叫び声が鳴る。速く振れば振るほどテンションが上がり、フラッシュも点滅する。さらにユニークなのは、録画ボタンを押しておく、振っている最中の映像が撮影される。音と映像は合成され YouTube に匿名でアップロードされたり、専用サイトでは、ほかの人の動画が位置情報も含め見ることができる





1万円アート - 歪んだ大人展 -
<http://1000yenart.com/>
<http://www.parco-art.com/web/museum/exhibition.php?id=648>

放送作家・高須光聖氏のキュレーションで、パルコミュージアムで開催された展覧会に作品を出展。台にいくつかの強力磁石を仕込み、その上から磁石つきのペンで文字を書こうとすると、予期せぬ方向にペンが引っ張られ、思い通りの字が描けない。想像を超えた歪みが生まれるのだ。強力磁石はすべて東京・秋葉原で購入し、制作費1万円に抑えたアート作品

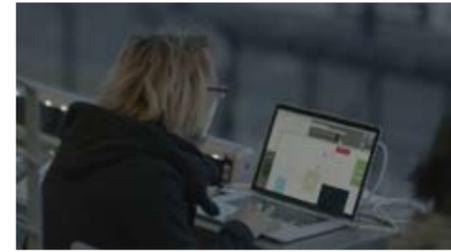


Humming Security Gate
<http://www.qosmo.jp/projects/humming-security-gate/>

オフィスビルなどに設置されているICカード式のセキュリティゲート。うまく反応しなかったりして不愉快になったり、焦りが生まれてしまうこともある。このセキュリティゲートに、カードをかざすとサウンドが鳴る仕掛けを導入した。一つの音ではなく、ゲートごとに音は異なり、同じゲートでも音が変わっていく。そのため、大人数が通るときは、偶然のメロディらしきものも生まれることもある。朝、まだ眠く不機嫌な出勤族に一瞬の笑顔をもたらす装置

星のや
<http://www.hoshinoya.com/>

リゾートホテル星のやのWebサイトの音楽を担当。音楽というより、カリヨンのような鐘の音が遠くから聞こえる効果音に近い。映像に映し出される、人の気持ちを癒してくれる自然の光景から聞こえるような心地いい音だ。視聴者の注意をどんなことでも惹きつけなければならぬテレビCMでは、絶対実現できないサウンド。Web表現ならではのサウンドだ



Sound of Honda / Ayrton Senna 1989

本文でも触れたアイルトン・セナの鈴鹿サーキットで記録した世界最速ラップの軌跡とエンジン音を再現するプロジェクト。「これがセナの音だ！」という確信が持てなかった澤井は、関係者がホームストレートを歩いている瞬間を狙って、設営中エンジン音を狙い撃ちで大量で流したという。人が「セナが走っている」という錯覚を起こすかどうかを観察したのだ。そして、自分自身もセナが走っている錯覚をした瞬間に、澤井は「これがセナの音だ！」と断言した



東京駅100周年 Tokyo Colors.
<http://www.tokystationcity.com/100years/tokyocolors/>

2015年の2月14日、バレンタインデーまで行われる東京駅八重洲口グランルーフのイルミネーション。風速計を設置し、実際の風の動きをイルミネーションに反映するなど、斬新な試みが行われている。澤井は、このイルミネーションの環境音を担当した。点灯は17時から23時まで。ぜひ訪れて、澤井のつくった環境音を自身の身体で感じていただきたい